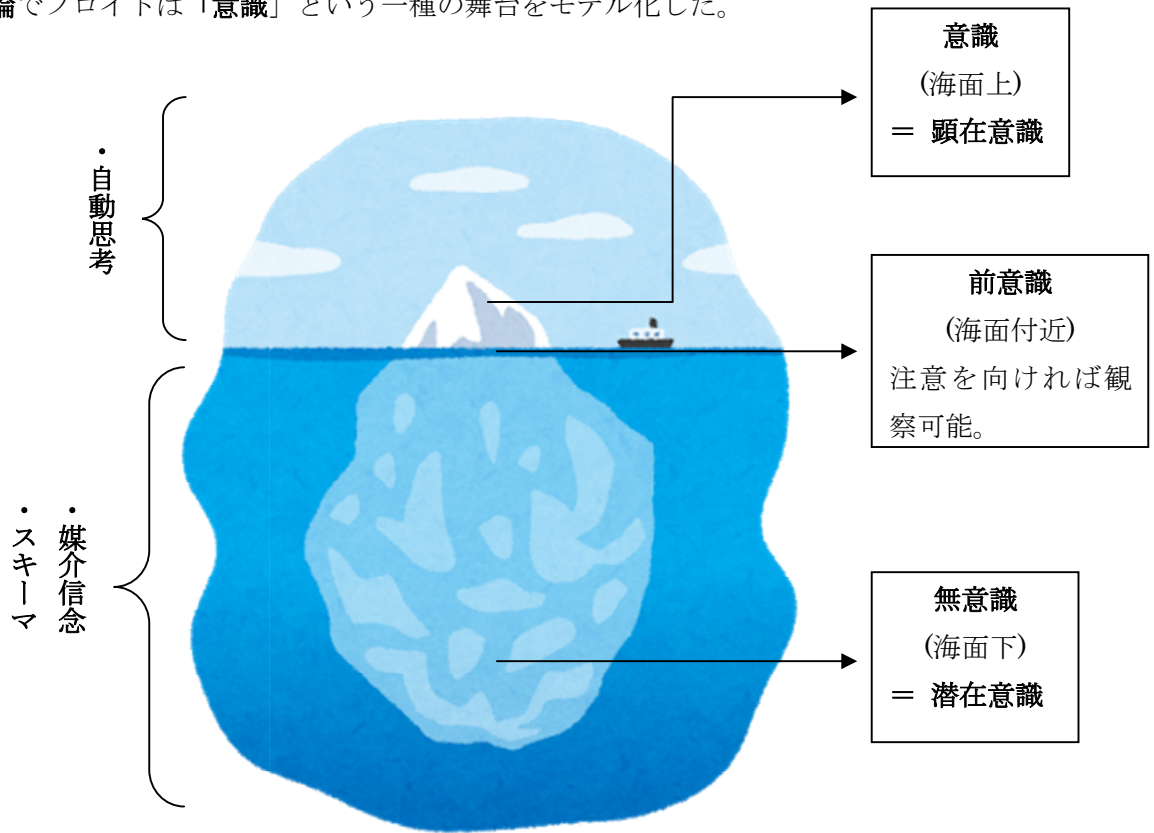


** フロイトの精神構造論 **

<心的装置論＝局所論> 局所：全体の中のある限られた部分。

この局所論でフロイトは「意識」という一種の舞台をモデル化した。



<構造論＝改定局所論>

局所論を改定した**構造論**では、フロイトは各々の舞台で演じる役者を想定した。その役者に相当するのが、①超自我、②エス(イド)、③自我である。

①**超自我**(super-ego)とは、顕在意識から無意識までの領域に及び、ルール、道徳、倫理観、良心、禁止、理想等を自我に伝え、自我を監視する機能を持つ精神機能の一つとして考えられている。

②**エス**(es,id)は、本能的な欲求や生理的な衝動を内包し貯蔵している**精神エネルギーの源**である。エスは**快楽原則**に従うので、欲求の満足を阻害する不安や苦痛を排除しようとする。よって善悪や論理的判断は存在せず、本能のままに行動しようとする精神機能である。エスは無意識の領域にあり、その空間は超自我、自我よりはるかに大きいと想定されている。またエスの一部の欲求や願望が**意識化、言語化**されることにより自我が生まれると考えられている。

③**自我**(ego)は、超自我とエスとの間に立ち、自分の心の動きを統合す**管制塔、司令塔**の役目をしている。つまり**評価や価値判断**を司っていると考えられている。

